IT資格道場

MB-800 学習用テキスト

予備知識ゼロから合格ラインへ —— 読んで理解する1冊目

無料サンプル(第1章まで)

MB-800 出題範囲(Microsoft Learn 公式 Study guide・Skills measured as of June 30, 2026)準拠
2026年11月版

SAMPLE

© IT資格道場｜無料サンプル｜転載・再配布・AI学習利用禁止

ご利用にあたって

- このテキストは「IT資格道場」(www.shikaku-doujou.com)の購入者限定テキストのうち、学習用テキストの第1章までを収録した**無料サンプル**です。どなたでもご覧いただけます。
- 無料サンプルも著作物です。転載・改変しての再配布・二次販売はできません。
- AI モデルの学習データとしてのご利用(学習目的の入力・データセット化を含む)はできません。
- 製品版(学習用テキスト・頻出度別ノート・暗記用ノートの3点)は、ご購入者を識別できる透かし入りのPDFとして提供されます。
- 本PDFはスマートフォン・タブレットでの閲覧に合わせたA5版面・文字サイズで組版しています。

SAMPLE

目次

この試験の範囲 [overview]

第1章 Set up Business Central

[1.1.1/1.1.2/1.1.3/1.1.4/1.1.5/1.2.1/1.2.2/1.2.3/1.2.4/1.2.5/1.2.6/1.3.1/1.3.2/1.3.3/1.3.4/1.4.1/1.4.2/1.4.3/1.4

- 設定支援（Assisted Setup）で会社を作る [1.1.1]
- 構成ワークシート（Configuration Worksheet）を作る [1.1.2]
- 構成パッケージ（Configuration Package）を作って使う [1.1.3]
- 仕訳帳で開始残高を作る [1.1.4]
- Business Central へ、Business Central からデータを移行する [1.1.5]
- プロファイル（ロール）を作って割り当てる [1.2.1]
- 新しいユーザーを設定する [1.2.2]
- アクセス許可とアクセス許可セットを作る [1.2.3]
- セキュリティ フィルターを適用する [1.2.4]
- セキュリティ グループとアクセス許可セットで権限を割り当てる [1.2.5]
- セキュリティの監査を設定して使う [1.2.6]
- レポートの設定とレイアウト [1.3.1]
- ジョブ キューを設定して使う [1.3.2]
- 番号シリーズ（No. Series）を設定する [1.3.3]
- Copilot とエージェントの機能を有効にする [1.3.4]
- ディメンションとディメンション値を設定する [1.4.1]
- グローバル ディメンションとショートカット ディメンション [1.4.2]
- マスター データの既定のディメンション [1.4.3]
- ディメンションの組み合わせをブロックする [1.4.4]
- 勘定タイプの既定のディメンション [1.4.5]
- 既定のディメンションの優先度 [1.4.6]
- 標準のワークフロー（Workflows）を設定する [1.5.1]
- 通知のしくみを設定する [1.5.2]
- 承認とワークフローのユーザー グループを設定する [1.5.3]

サンプルはここまでです

SAMPLE

3 冊の使い方は、ダウンロード欄の案内を参照してください。

SAMPLE

この試験の範囲 [overview]

MB-800(Microsoft Certified: Dynamics 365 Business Central Functional Consultant Associate) は 、Dynamics 365 Business Central を会社に導入して設定し、日々の業務を回せるかを問う試験です。レベルは Intermediate、役割は Functional Consultant です。

- 試験時間：100 分
- 問題数：50 問
- 合格：1000 点満点の 700 点以上
- 言語：日本語で受験できます
- 認定の更新：12 か月ごと

出題範囲は 4 つの分野です。この教材も同じ順に章を立てます(下の表)。配点は、学習ガイドの「Skills at a glance」にある割合です。

分野	配点	内容
1 Set up Business Central	20〜25%	会社の作成とデータの移行、ユーザーと権限、レポートと番号シリーズ、ディメンション、ワークフローと承認
2 Configure financials	30〜35%	一般会計の設定、勘定科目表、転記グループ、銀行口座と仕訳帳、仕入先と顧客、固定資産
3 Configure sales and purchasing	10〜15%	在庫の設定と原価、顧客と仕入先のマスターデータ、価格と割引
4 Perform Business Central operations	30〜35%	画面の使い方、購買と販売の伝票、請求書とクレジットメモ、支払と消込、固定資産と在庫の日々の処理

読み方：

- 版：2026 年 6 月 30 日時点で測定されたスキルの学習ガイド
- 細目の印：節の見出しの後ろにある [1.1.1] のような番号
- 画面名とフィールド名：日本語で受験しても英語表記で出るので、本文も英語のまま

SAMPLE

第1章 Set up Business Central [1.1.1/1.1.2/1.1.3/1.1.4/1.1.5/1.2.1/1.2.2/1.2.3/1.2.4/1.2.5/1.2.6/1.3.1/1.3

この章は配点の 20〜25% にあたります。会社を作り、データを入れ、ユーザーと権限を決め、番号やディメンションの土台を整え、承認の流れを組むところまでが範囲です。日本語の試験でも、設問の画面名やフィールド名は英語表記で出るので、画面の名前は英語のまま覚えてください。

設定支援（Assisted Setup）で会社を作る [1.1.1]

会社（company）は、事業単位や法人に属するビジネスデータの入れ物で、サインアップ直後のテナントには、デモ会社と、空の会社 My Company が入っています。[^c1-1]

新しい会社を作る道具は、Create New Company という設定支援ガイドです。Companies ページから、または My Settings ページの Company フィールドのルックアップから起動します。作るには Super 権限セットが割り当てられている必要があります。ガイドは3つのテンプレートと空白オプションの計4択を出します。[^c1-1]

種類	中身	使いどころ
Evaluation - Sample Data	サンプルデータ入りの評価用	試す、見せる
Advanced Evaluation - Complete Sample Data	完全なサンプルデータ入りの評価用	機能を広く試す
Production - Setup Data Only	勘定科目表、支払方法、財務レポート定義などの設定データだけ。サンプルデータは無い	本番稼働の会社の出発点
Create New - No Data	設定データも無い空の会社	一から設定する

Evaluation 系の2種は、30日トライアルへ切り替えずに使えます。Production と Create New の2種は、30日トライアル期間として使います。[^c1-1]

作成を始めてから使えるようになるまで、数分かかります。Companies ページのセットアップステータスで、準備が終わったかを見ます。新しい会社に初めてサインインすると、Company Setup ガイドが住所、銀行情報、在庫原価計算方法（inventory costing method）などを尋ねて基本設定を作ります。基本が整ったら残りの中核の領域を設定し、その後に顧客や仕入先などの業務データを加えます。[^c1-1]

ガイドで入れた情報は、それぞれ別の所で使われます。会社の住所は請求書などの文書に、銀行情報は支払に入り、原価計算方法は価格の計算と在庫の評価に使われます。準備ができた会社へは、My Settings で切り替えます。30日トライアルの間は新しい会社をいくつでも作れますが、作った会社が使えるのはトライアルの間だけです。[^c1-1]

会社名（name）は、作成後に変更できません。変えられるのは、画面全体に表示される Display Name だけです。オンプレミス版は会社名も変更できます。会社は環境（environment）の中に置かれ、環境には Production と Sandbox の2種類があります。[^c1-1]

環境は国/地域ごとに固有です。Production 環境は実業務のデータを持ち、Sandbox 環境は新しい業務プロセスや機能を安全に試す場所として使います。複数の国/地域で業務する組織に要るのは、国/地域ごとの別々の環境。同じ国/地域にある拠点は1つの環境を共有し、その中の別々の会社として設定するので、拠点ごとの運用を分けて管理

SAMPLE

できます。会社へのアクセスがあれば、その会社がある環境へのアクセスもあります。別々の環境にある複数の会社に入れるユーザーは、サインインのときに作業する環境を指定します。[^c1-1]

Companies ページの Copy アクションは、既存の会社の内容から2つ目の会社を作ります。バックアップの代わりには使いません。バックアップは .bacpac のデータベースエクスポートで取ります。取り違えやすいので、Copy は「会社を増やす」操作、.bacpac は「退避する」操作と分けて覚えてください。[^c1-1]

複製では、引き継がれない設定があります。SMTP のメール アカウントでメールを送っている会社を複製すると、アカウントのパスワードは含まれないので、新しい会社の SMTP Account ページで入れ直します。Dataverse または Sales との連携が有効な環境で複製すると、複製先では次の4つがクリアされます。

- Dataverse and Dynamics Connection Settings（連携を複製先で正しく始め直すため）
- 連携レコード（複製先が複製元の連携先を指さないため）
- 連携の同期ジョブ（背景の同期を止めるため）
- 同期エラー（複製元のエラーなので）

[^c1-1]

構成ワークシート（Configuration Worksheet）を作る [1.1.2]

構成ワークシートは、新しい会社の設定に使うテーブルを集めて、分類して、進み具合を管理する作業台です。ページの正式名は Config. Worksheet、ソースは Config. Line テーブルです。構成ツールの部品は4つあります。Configuration Worksheet 、Configuration Packages 、Configuration Questionnaires 、Configuration Templates です。[^c1-4][^c1-28]

書式は単純な階層で、Area が Group を含み、Group が Table を含みます。Line Type の値は Area、Group、Table の3つです。Area と Group は省いてもよく、整理に役立ちます。Status は計画と進捗管理に使い、In progress、Completed、Ignored、Blocked から選びます。[^c1-2][^c1-28]

テーブルは Get Tables アクションで集めます。リクエストページのオプションは、Include with Data Only、Include Related Tables、Include Dimension Tables、Include Licensed Table Only です。Include with Data Only はデータベースのレコードを含むテーブルだけを入れ、Include Related Tables は一覧のテーブルに関連するすべてのテーブルを、Include Dimension Tables はディメンションの詳細を持つテーブルを入れ、Include Licensed Table Only はライセンスの制限で使えないテーブルを除きます。続けて Get Related Tables を使うと関連テーブルが加わります。ただし2つの場合は自動で入りません。1つは、リレーションに条件が付いているときです。たとえば Customer の Location Code が入力されているときだけ Location に関係する場合、Location は追加されません。もう1つは、関連先に WHERE 句などのフィルターが付いているときです。どちらも手動で追加します。[^c1-2][^c1-28]

行をパッケージに入れるには、行を選んで Assign Package を使い、Configuration Packages ページで既存のパッケージを選ぶか、新しく作ります。行の Package Code には割り当て先のコードが入り、既存のパッケージを選べば No. of Tables で現在のテーブル数が分かります。ワークシートの削除とパッケージの削除は連動しません。片方から消しても、もう片方のテーブルは残り、つながりが切れて Package Code が空になるだけです。[^c1-2][^c1-28]

Database Data アクションは、Page ID の主ページを経由してデータベースのレコードを直接表示します。Page ID と Page Name が自動で入るのは、選んだ W1 テーブルだけです。同じテナント内の会社同士なら、よく使う値（たとえば

SAMPLE

サービス管理の Symptom Code）を、ワークシートから既存の会社から新しい会社へコピーできます。[^c1-3][^c1-28]

構成パッケージ（Configuration Package）を作って使う [1.1.3]

構成パッケージは、ある会社の設定データを持ち出して、別の会社へ同じ設定を入れるための入れ物です。Business Central online には、Microsoft の既定アプリケーション（ローカル機能を含む）用のパッケージが既定で1つあります。コピーして、コピーの方を変えて使います。販売パートナーは機能領域ごとにパッケージを分けることが多く、製造用と販売用を別にしておけば、必要な領域だけ後から入れられます。[^c1-2]

パッケージの各テーブルでは、含める項目を選べます。Clear Included で選び直し、Set Included で全項目を入れます。項目ごとの Validate Field を外すと、その項目の値は検証されません。書き出しは .rapidstart ファイルか Excel です。Excel を使う場合は、Business Central のデータ構造に合っているので、Configuration Packages ページから書き出したブックを使います。テーブルをまたぐ値の対応づけ（mapping）は、Configuration Package ページで行います。項目に直接定義した対応づけが、参照先テーブルの主キーに定義した対応づけより優先されます。項目が別のテーブルへのリレーションを持つ時は、関連先テーブルの主キー項目に定義した対応づけも探されますが、その関連先テーブルが構成パッケージに含まれていなければ探されません。[^c1-2][^c1-3]

作る前に押さえる前提は5つあります。

- 転記済みエントリを持つテーブル（顧客、仕入先、品目の元帳エントリなど）には、データを取り込めません。転記済みのエントリは後から仕訳帳で転記します。
- 書き出すユーザーは、パッケージ内の全テーブルに対して Direct Read の実効権限が必要です。
- 取り込むユーザーは Direct Insert と Direct Modify の実効権限が必要で、Indirect では足りません。
- 取り込み先と同じバージョンの Business Central で作ります。スキーマが違うと、存在しないテーブルや項目は取り込まれません。主キーが違うテーブルや、データ型が違う項目も取り込めません。
- Config Package Card の Exclude Configuration Tables を選ぶと、構成質問票、テンプレート、ワークシートのテーブルがパッケージから外れます。選ばないと、書き出し時に自動で加わります。

[^c1-2]

取り込んだ後は、ワークシートかパッケージのページで取り込み、No. of Package Errors を見ます。エラーがあればドリルダウンで Config. Package Records を開き、Show Error で「XX is not a valid option」のような値の不一致の理由を読みます。対応づけを設定してあれば Apply Data で反映し、その後 Migration Overview の No. of Migration Errors を見て、残りがあればテーブルの Errors アクションで Invalid の付いたレコードを直します。行を選んで Show Error を選ぶと、Error Text 項目にエラーの理由が、Field Caption 項目にエラーのある項目の名前が出るので、Migration Record アクションで開く Migration Record ページでレコードを直します。[^c1-3]

構成質問票（Configuration Questionnaire）は、よく使う設定テーブルについて、見込み客や顧客から設定に要る情報を集めるためのものです。構成質問票の回答を適用する Apply Answers は、回答の形式を自動では検証しません。日付の欄に文字列が入っていないかなどを、適用する前に人が確かめます。[^c1-3][^c1-2]

パッケージを使ってよいのは、会社を初めて設定するときだけです。すでに本番で動いている会社には使いません。大量のデータを取り込むと、処理中は全員が使えなくなるおそれがあるからです。稼働中の会社には XMLport での取り込みと書き出しが勧められています。[^c1-3]

SAMPLE

構成テンプレート（Configuration Templates）は、取り込むレコードに自動で割り当てる既定設定のまとまりで、顧客や仕入先などのマスターデータの取り込みを楽にします。クラウド移行ツールの代わりに使える手段で、組み込みのテンプレートを使うか自分で作り、Excel に書き出して顧客データを Excel で扱うこともできます。インポート用の既定のパッケージは27テーブルで、顧客、仕入先、品目、勘定科目などのマスターデータを含みます。Config. Package Card の Product Version は、英数字で最大80文字です。[^c1-2][^c1-28]

仕訳帳で開始残高を作る [1.1.4]

パッケージで取り込めるのはマスターデータまでで、残高は取り込めません。転記済みエントリを持つテーブルには取り込めないからです。残高は、取り込んだ後に仕訳帳で転記して作ります。新しい会社の構成に使うテーブルの種類の1つとして、開始残高の転記を助けるテーブルも挙げられています。[^c1-2][^c1-28]

仕訳帳の土台は General Journals ページで、ほとんどの仕訳帳はこれをもとにしています。使える勘定タイプは G/L 勘定のほか、銀行、顧客、仕入先、従業員です。顧客の勘定に仕訳しても、転記グループ（posting group）を経由して、G/L の売掛金勘定にエントリが作られます。つまり顧客や仕入先の開始残高を入れると、補助元帳と総勘定元帳が同時に動き、両者が一致したまま残高が立ちます。[^c1-7]

仕訳帳に入れた内容は、転記するまでは一時的な情報で、仕訳帳の中で変更できます。転記すると各勘定のエントリに送られ、変更できなくなります。転記後に直すには、消込解除（unapply）をするか、反対仕訳や訂正仕訳を転記します。[^c1-7]

仕訳テンプレートごとに専用ページがあり、各テンプレートに対して個人用の仕訳帳を仕訳バッチとして作れます。既定では限られた項目だけが表示され、Account Type などは Show More Columns で出し、Show Fewer Columns にすると全行に同じ Posting Date が使われます。General Journal Batches ページの Suggest Balancing Amount を選ぶと、同じドキュメント番号の行の Amount が、貸借が一致する金額で自動入力されます。Background Error Check をオンにすると、転記前に誤りを背景で検査し、Check Document と Check Journal の FactBox に問題が出ます。[^c1-7]

構成パッケージで残高を入れる手順は、次のとおりです。

1. 構成ワークシートかパッケージのページで、顧客や G/L 勘定などのマスターデータを取り込む。
2. Create G/L Acct. Journal Lines を選び、Options FastTab に Journal Template などを入れて OK を押す。仕訳行ができるが、金額は空である。
3. 仕訳帳テーブルを Excel に書き出し、旧システムの金額と、転記する勘定、相手勘定（balancing account）を入れる。
4. 新しい会社へ取り込んで Apply する。
5. ワークシートで仕訳帳のテーブルを選び、Database Data から内容を見て Post する。

顧客、仕入先、品目の残高も同じ型です。ただし銀行口座の残高だけは例外で、この手順で銀行口座に結び付く G/L 勘定へ直接転記してはいけません。銀行口座の設定の手順に従います。[^c1-3]

Business Central へ、Business Central からデータを移行する [1.1.5]

移行の手段は、移行元によって選びます。

SAMPLE

移行元	手段
Excel などの表	設定支援の Data Migration ガイド。G/L accounts、Customers、Vendors、Items の4つのデータセットがあり、種類ごとにシートを作る
新規会社の設定やマスターデータ	構成パッケージと構成テンプレート
Business Central オンプレミス、Dynamics GP 2015 以降、Dynamics SL 2015 以降	クラウド移行ツール。SQL ソースの Custom migration もある
非 SQL のソース	構成パッケージとテンプレートで Business Central オンプレミスへ移行し、その後クラウド移行ツールでオンラインへ切り替える
Dynamics NAV	直接は移行できない。Business Central オンプレミスへ上げてからオンラインへ切り替える

[^c1-6][^c1-28]

オンプレミスからのクラウド移行では、移行元の SQL Server が 2016 以降で、データベースの互換性レベルが 130 以上である必要があります。Business Central のバージョン別の経路は3つです。

- 25 以降: オンラインへ直接移行
- 15 から 24 まで: 25 以上へアップグレードしてから移行
- 14: 完全移行にするか、再実装ツール（Business Central 14 Reimplementation tool）を使うかの2択

再実装ツールはマスターデータ、開始残高、設定だけをクラウドへ移します。[^c1-5][^c1-6]

転送の部品は、Azure Data Factory とパイプライン、Integration Runtime です。Azure Data Factory は元と先のデータベースを直接つなぎ、アプリ内の権限は見ません。使うのは SQL の権限だけです。パイプラインは活動のグループです。移行元が SQL Server なら、オンプレミスに入れる self-hosted integration runtime を使います。Azure SQL Database なら Azure Integration Runtime です。Business Central Server のインスタンスは要りません。[^c1-5]

移行は5つの段階で進みます。

1. 準備: 計画、前提条件、データの品質、性能の確認。
2. クラウド移行の設定: Set up Cloud Migration ガイドを実行する。この段階ではデータを移さない。接続とパイプラインを作る。
3. データ複製: Run data replication ガイドを実行する。
4. データ アップグレード: 複製の後、Cloud Migration Management ページの状態が Upgrade Pending になることがある。Run Data Upgrade Now を選んで実行する。
5. 完了: ユーザー アクセス、連携の再接続、監視、本番切り替え。

[^c1-5]

ここに試験で聞かれやすい注意が集まっています。データ アップグレードを実行する前に、すべての会社のデータを複製し終えます。アップグレードに成功した後は、古いバージョンからの複製を再び実行できません。アップグレード済みと未アップグレードのレコードが混ざり、オンライン側のデータを壊すおそれがあるからです。複製は何回でも実行

SAMPLE

できます。初回が最長で、以降は変更分だけが移ります。使用中のシステムから移すなら、本番に移る前に最低もう1回実行します。[^c1-5]

移らないものもあります。ほとんどのシステムテーブル、ユーザー、アクセス許可は移りません。レコード リンクも、ユーザー ID に結び付くため現時点では移りません。テーブルと拡張テーブルの ReplicateData プロパティは既定で Yes で、拡張のテーブルも既定で移行対象です。[^c1-5]

対象のデータは移行のたびに上書きされるため、移行の設定を始めると、オンライン側で入力できるのは移行の対象外のデータだけになります。この読み取り専用の状態を作るのが Intelligent Cloud アクセス許可セットで、設定が終わると、SUPER を持たない既存のユーザーが自動でこのセットに切り替わります。後から追加したユーザーは自動では切り替わらないので、手で割り当てます。設定の前に、各会社に SUPER を持つユーザーを最低1人置きます。すでに業務で使っている本番環境を移行先にしてはいけません。オンライン側の既存データが、オンプレミスのデータで上書きされます。[^c1-5]

同じテナント内で会社の間にデータを動かすときは、次の2つが使えます。Companies ページの Copy で会社ごと複製する方法と、構成パッケージで別の会社へ写す方法です。前者は丸ごと、後者は選んだテーブルだけを動かします。[^c1-1][^c1-3]

プロファイル（ロール）を作って割り当てる [1.2.1]

画面の見え方を決めるのがプロファイルです。業務上の用途はロールなので、画面上は Profile (Role)、管理ページは Profiles (Roles) と呼ばれます。プロファイルのカードには、ロール名、ユーザー設定（user settings）、そのプロファイルが使う Role Center が入っています。[^c1-8]

作成のいちばん早い道はコピーです。Profiles (Roles) ページで行を選び、Copy Profile で Profile ID と Display Name を入れると、ユーザーが作ったページ カスタマイズや拡張由来のカスタマイズも一緒にコピーされます。有効化に関わるチェックボックスは、Enabled、Use as default profile、Disable personalization、Show in Role Explorer の4つ。Enabled は、ユーザーが選ぶ Available Roles ページにそのロールを出すかどうかで、Use as default profile は、ロールを割り当てていないユーザーに当てる既定のプロファイルを決めます。Disable personalization は、そのロールのユーザーが作業画面をパーソナライズできるかどうかを決め、Show in Role Explorer は、プロファイルに含まれる機能への操作を Role Explorer の拡張表示に出すかどうかを決めます。特定のユーザーだけに使わせたいプロファイルは、Description に Navigation menu only と入れると、My Settings の利用可能なロールの一覧から外れます。[^c1-8]

ユーザーへの割り当ては、次の順で行います。Profiles (Roles) ページで User Personalization List アクションを選びます。User Settings ページでユーザーを選んで Edit を押し、Profile ID フィールドでプロファイルを選びます。ユーザー自身は My Settings のロールで変えられます。割り当て済みのプロファイルは、ユーザーかセキュリティ グループに割り当て済みの間は削除できません。拡張由来のプロファイルも削除できず、削除は1度に1つずつです。プロファイルを管理する前に、ユーザーを Microsoft 365 管理センターで作っておく必要があります。[^c1-8]

エクスポートとインポートも用意されています。Export Profiles は AL ファイルを含む zip を出力し、Import Profiles は Import Profiles 設定支援ガイドで取り込みます。[^c1-8]

ユーザーが使える機能は、プロファイルとは別に、ユーザーやユーザー グループに割り当てるアクセス許可で決まります。ページのカスタマイズに必要な権限セットは D365 Profile Mgt. です。カスタマイズは、ページ オブジェクトに定

SAMPLE

義されていなくても元テーブルや拡張テーブルにあるフィールドを表示できます。パーソナライズにはそれができません。[^c1-9][^c1-29]

ロール センターの部品には、自動で切り替わる見出し（Headline）、未処理の売上請求書の件数や月の売上合計のような集計を示すデータの Cue（大きな数値を出す wide の Cue もあります）、別のページや作業を開くタイルのアクションの Cue があります。[^c1-34]

新しいユーザーを設定する [1.2.2]

オンラインのユーザーは、まず Microsoft 365 管理センターで作ります。このアカウントは Business Central 専用ではなく、Power BI など他のアプリにも使えます。ライセンスの割り当ては、会社の Microsoft 365 管理者が管理センターで行うか、パートナーが管理センターかパートナー センターで行います。Business Central 側へ取り込む方法は2つで、併用できます。[^c1-10]

方法	動き
初回サインイン	ユーザーが初めてサインインしたときに自動で作られる。最初にサインインした人は SUPER 権限セット付きで作られる
Update Users from Microsoft 365	Users ページから、複数のユーザーをまとめて取り込む。実行には SUPER 権限セットが必要

[^c1-10]

Update Users from Microsoft 365 は、ユーザー情報とライセンスの割り当てを取り込みます。ライセンスが割り当てられていないユーザー（たとえば Dynamics 365 管理者）は更新されません。そのユーザーは、次にその環境にサインインした時に更新されます。初回に設定する前や、新しいチームを足すときに向いているのは、管理者が開始時のアクセス許可、ユーザー グループ、プロファイルを事前に調整できるからです。取り込みでは、最初にサインインしたユーザーと管理者を除く全員から、SUPER のアクセス許可セットが外されます。初回サインインの後は、ユーザーを削除できません。オンプレミスは Users ページで直接作成、編集、削除します。[^c1-10]

Restore User Default User Groups は、手動で割り当てたユーザー グループと権限を消し、現在のプラン（ライセンス）に合う既定のユーザー グループへ戻します。対象は選んだ1人です。[^c1-10]

ライセンスで変わることは3点あります。

- 有償は Essentials、Premium、Team Member、External Accountant の4種で、Microsoft 365 のライセンスだけでも、Teams から Business Central のデータを読めます。
- Device ライセンスは、1台の端末を複数のユーザーが同時に使えるライセンスで、販売時点、工場、倉庫の端末が典型です。Dynamics 365 Business Central Device Users グループにユーザーを入れ、同時にサインインできる数は購入した Device ライセンスの数で決まります。Device のユーザーは、最初にサインインするユーザーにはなれません。
- Essentials のユーザーは、Company Information の Experience が Premium の会社にサインインできません。Premium のユーザーは Experience が Essentials の会社に入れますが、Premium の機能は使えません。

[^c1-10][^c1-25]

SAMPLE

ライセンスはアクセス許可より強く働きます。Entitlement（ライセンスの権限）が常に優先されます。SUPER を割り当てられていても Team Member のライセンスなら、Team Member の Entitlement が許すオブジェクトにしか入れません。Essentials に SUPER を付けたユーザーの方が、Team Member に SUPER を付けたユーザーより多くのことができます。[^c1-11][^c1-25]

ライセンスごとの既定の権限は、License Configuration ページで変えられます。ライセンスを選び Configure を押して、Customize permissions をオンにします。変更が効くのは、変更後にそのライセンスを割り当てるユーザーだけで、既存のユーザーは更新されません。Team Member の既定の権限セットは、D365 READ、D365 TEAM MEMBER、EDIT IN EXCEL - VIEW、EXPORT REPORT EXCEL です。LOCAL も付きます。[^c1-10]

ユーザーのアクセスを止めるには、User Card の Status を Disabled にします。参照は残ったままサインインできなくなり、動いているセッションも止まり、Enabled に戻せば再開します。パートナーの委任管理者（GDAP）は、User123456@partnerdomain.com の形の匿名名で Users に出ます。権限を割り当てられ、変更ログで行動を追えます。[^c1-10]

User Setup ページは、先に存在するユーザー アカウントごとの制限を決めます。Allow Posting From と Allow Posting To で転記できる期間を決めます。Register Time は作業時間の記録を決め、Sales、Purchase、Service の Resp. Ctr. Filter は責任センターを絞ります。たとえば決算の後に、一般のユーザーの Allow Posting To を締め日に設定すれば、その日より後の転記を止められます。[^c1-29][^c1-11]

アクセス許可とアクセス許可セットを作る [1.2.3]

アクセス許可セット（permission set）は、データベースのオブジェクトに対するアクセス許可の集まりです。ユーザーは1つ以上のセットが割り当てられるまで、Business Central に入れません。セットの種類は3つあります。Microsoft が提供する System、組織が作る User-Defined、拡張機能が持ち込む Extension です。編集できるのは User-Defined だけです。[^c1-11]

セットの中の1行は、オブジェクトの種類と ID に対して、5つのアクセスを決めます。Read、Insert、Modify、Delete、Execute の各 Permission です。Type で Include（含める）か Exclude（除く）を選びます。Include 側の値には強さの順位があります。

値	意味	順位
Blank	実行できない	最低
Indirect	ユーザーが完全なアクセスを持つ別の関連オブジェクトを通してだけ実行できる	2番目に高い
Yes	実行できる	最高

[^c1-11]

Indirect の典型は、Sales-Post コードユニット（codeunit 80）です。ここでのユーザーは、codeunit 80 の Sales-Post を実行する権限を持っています。投稿処理は Sales Line テーブルを変更します。ユーザーが Sales Line に Indirect の Modify を持っていれば、投稿は成功します。一方で、ユーザーが Sales Line を直接開いて自由に変更することはできません。権限の付け方としては、必要最小限で足ります。[^c1-11]

SAMPLE

Exclude 側の値は3つあります。Blank は階層に従う、Exclude はそのアクセスを除く、Reduce to indirect は Direct を Indirect に下げるです。たとえば G/L エントリに Direct のアクセスがあるセットで、フルアクセスは渡したくないときに Reduce to indirect を使います。[^c1-11]

含める側と除く側が衝突したときは、除かれます。計算は3段です。

1. 含まれる権限の一覧を作る
2. 除かれる権限の一覧を作る
3. 除かれる分を含まれる一覧から引く

Indirect を除くことは、Reduce to Indirect と同じ結果になります。セットを丸ごと除く（Exclude を選ぶ）と、そのセットのすべての権限が除かれます。除外が効くのは、いま展開しているセットの中だけで、元のセットは変わりません。ほかのセットを含めるには、User-Defined のセットの Permission Set ページを開き、Permission Sets ペインに含めたいセットの行を追加します。この方法なら、そのままでは手を入れられない Extension と System の種類のセットの権限も含められます。ユーザー定義のセットに System の権限を追加すると、Microsoft がその権限に加えた変更は自動で反映されます。[^c1-11]

除外の結果を確かめる場所は2つ。セットを丸ごと除くと、Permission Sets ペインに種類が Excluded の行ができます。除いたセットをもう一度含めたいときは、その行を削除します。Result ペインの Inclusion Status は、追加したセットから何かを除いていると Partial と表示され、どのセットで除外したかの目印になります。セットの権限の全体を見る場所は、View all permissions で開く Expanded Permissions ページ。このページには、そのセットに直接割り当てた権限と、追加したセットの権限が並びます。[^c1-11]

ライセンス由来の Entitlement は、ほかのセットより強い場合があります。Effective Permissions ページの Source が Entitlement の行は、ランクが高ければ他のセットの値を上書きします。上書きされて効かない値は、括弧付きで表示されます。[^c1-11]

セットをコピーする方法は3つあります。

方式	結果
Copy by reference	元のセットと、加えられていたセットが Results ペインに並ぶ。元の変更が反映される
Flat permission copy	全セットの権限が、セットごとの区分なしにフラットな一覧で入る
Clone	元のセットの完全なコピー

[^c1-11]

System のセットをコピーするときに Notify on Changed Permission Set をオンにすると、元の System セットの名前や内容が将来のバージョンで変わったときに通知されます。通知には My Notifications ページで Original System permission set changed が有効である必要があります。[^c1-11]

必要な権限が分からないときは、操作を記録します。Permissions ページで Record Permissions を選んで Start を押し、必要な操作を実際に行ってから Stop を押します。Yes を選ぶと、記録された権限がセットに追加されるので、各オブジェクトに Insert、Modify、Delete を認めるかを指定します。記録は、ポップアウトした別窓か、同じタブで行います。[^c1-11]

SAMPLE

セットは別のテナントに運べます。Export Permission Sets は XML を出力し、既定の名前は Export Permission Sets.xml です。もう一方のテナントで Import Permission Sets を使います。Update existing permissions を選ぶと同じ名前のセットが統合され、選ばないと同名のセットはスキップされて、スキップされたことが通知されます。[^c1-11]

SUPER は、ライセンスで許されたすべてのオブジェクトにアクセスできる特別なセットです。注意が必要な設定が1つあります。9001 User Group Member または 9003 User Group Permission Set テーブルに Insert や Modify を与えると、危険です。そのセットを持つユーザーが自分を他のグループに加えて、意図しない権限を得るおそれがあるからです。[^c1-11]

セキュリティ フィルターを適用する [1.2.4]

アクセス許可は「どのテーブルを触れるか」を決めます。セキュリティ フィルターは、そのテーブルの「どの行を見せるか」を決めます。たとえば顧客テーブルの Read を持つユーザーに、特定の顧客のレコードだけを読ませる、という使い方です。セキュリティ フィルターはテーブル データのアクセス許可の行に設定し、そのアクセス許可セットをユーザーに割り当てます。[^c1-12]

作る手順は次のとおりです。

1. Permission Sets を開き、対象のセットを選ぶ。
2. Permissions を開き、対象のテーブル データの行にある Security Filter 列を選ぶ。
3. Table Filter ページで Field Number を選び、Field Filter に値を入れる。たとえば営業担当者コード（Salesperson Code）の項目に、担当者 Annette Hill のコード AH と入れる。

[^c1-12]

書き方の決まりがあります。ワイルドカードの * と ? は使えません。< > | & .. = などの演算子は使えます。演算子を書かなければ、既定は = です。長さはフィールド名、区切り、記号、演算子を含めて最大 200 文字です。[^c1-12]

効き方で試験に出るのは、複数のセットが重なったときです。同じテーブルを対象にする複数のアクセス許可セットが割り当てられると、最も制限の緩いフィルターが使われます。つまり1つのセットが全件を見せるなら、その人は全件を見ます。絞り込みを確実に効かせたいときは、緩いセットが他のルートから割り当てられていないかを見ます。[^c1-12]

開発者はコードの Record 変数に SecurityFiltering を設定して、フィルターの適用の仕方を決めます。値は4つです。

値	動き
Filtered	フィルターの外のレコードは存在しないように見える
Validated	フィルターの外のレコードに触れるとエラーになる
Ignored	フィルターを無視する。管理者には通知されない
Disallowed	そのレコードにフィルターが設定されているとエラーになる

Validated は旧バージョンとの互換用で、性能が下がります。1つのフィールドのフィルターだけを扱い、Query 変数では使えません。ページ上の暗黙のレコードの既定は Filtered で、この既定は変更できません。FlowField の計算にも

SAMPLE

セキュリティ フィルターが効きます。たとえば販売員コードで絞ったフィルターが Filtered なら、売上の合計を出す FlowField は、その販売員コードの売上だけを合計して見せます。[^c1-12]

セキュリティ グループとアクセス許可セットで権限を割り当てる [1.2.5]

ユーザーが多いときは、1人ずつではなくグループに権限を付けます。Business Central online のセキュリティ グループは、Microsoft Entra のグループを Business Central に結び付けたものです。Dynamics 365 のアプリをまたいで再利用でき、グループに権限を付ければメンバー全員に及びます。グループ自体は Microsoft Entra 管理センターで作ります。[^c1-13]

Business Central 側では、Security Groups ページで New を選び、オンラインでは Microsoft Entra security group name フィールドで、オンプレミスでは Windows group name フィールドでグループを選びます。メンバーがメンバー カードや Security Group Members ページに現れるのは、Business Central にユーザーとして追加済みの場合だけです。権限は Permissions で付け、Permission Set フィールドで1つずつ、または Add multiple で複数付けます。Company 列を空にすると全会社に、会社を入れるとその会社だけに適用されます。[^c1-13]

オンプレミスで Entra のグループを使うには、CustomSettings.config の EnableEntraGroupsOnPrem を true にします。Windows 認証を使うなら false で、false が既定値です。Entra ID 認証でオンプレミスのグループを使うには、25.11、26.5、27.4 以降へのアップグレードが必要です。2023 release wave 1 より前に、Windows Group のライセンス種別だったユーザーは、アップグレード時にセキュリティ グループに変換されます。[^c1-13]

権限が渡る道は3つあります。

道	設定する場所
ユーザーに直接	User Card の User Permission Sets FastTab、または Users ページの Permission Set by User
セキュリティ グループ	Security Groups ページの Permissions
ユーザー グループ（旧）	旧方式。バージョン 25.0 でユーザー グループは廃止予定とされ、構成可能なアクセス許可セットとセキュリティ グループに置き換わった

[^c1-11][^c1-13][^c1-25]

ユーザー カードからの割り当ては、Users でユーザーを選び、Edit で User Permission Sets FastTab の新しい行に入れ、Company を空にすると全会社に適用されます。複数のユーザーに割り当てるときは、Users ページの Permission Set by User を使います。All Users チェックボックスを選ぶと、全ユーザーに割り当てられます。会社を限定したいセットは、セットの中ではなく割り当てのときに会社を指定して、会社ごとに別々に割り当てます。[^c1-11]

実際に効いている権限は Effective Permissions ページで見ます。ユーザー カードから開きます。Permissions の部分は、そのユーザーが触れるオブジェクトの一覧で、編集できません。By Permission Set の部分は、どのセットから権限が来ているか、その Source（セキュリティ グループ由来か、継承か）を示します。ここで編集できるのは User-Defined のセットだけで、編集はそのセットを持つ他のユーザーにも及びます。SECURITY か SUPER が無いと、他のユーザーの Effective Permissions は見られません。セキュリティ グループ側からは、FactBox と Permission Set by Security Group で割り当て済みのセットを確かめます。Users ページでも、選んだユーザーの FactBox に Permission Sets from Security Group と Security Group Memberships のカードが出ます。セットごとの権限の

SAMPLE

分布は Permissions Overview ページで見られ、そのセットを割り当てたユーザーとセキュリティ グループも表示されます。[^c1-11][^c1-13]

新しいユーザーに最初から付く権限は、ライセンスから決まります。ライセンスに割り当てたユーザー グループに応じて、ほかのアクセス許可セットも自動で加わります。そのライセンスで新しいユーザーを作ると、ユーザー グループ由来のセットとライセンス由来のセットの両方が割り当てられます。初回のサインインで自動で作られたユーザーにも、Users ページの Update Users from Microsoft 365 で取り込んだユーザーにも、同じ開始時の権限が付きます。License Configuration で変えた設定は、変更前に割り当て済みのユーザーには効きません。ユーザーを Microsoft 365 から取り込む前に、ライセンスごとの構成を決めておくと、後から全員の権限を直す手間が減ります。[^c1-10]

セキュリティの監査を設定して使う [1.2.6]

Business Central には変更を追う仕組みが2つあり、変更ログ（Change Log）は、ユーザーがデータベースのデータに加えた直接の変更をすべて追います。Change Log Setup ページで、ログのオンとオフを切り替え、その切り替えの操作自体も記録されます。Tables アクションで追跡するテーブルと変更の種類を指定し、テーブルごとに Log Insertion、Log Modification、Log Deletion を Some Fields か All Fields から選び、Some Fields を選んだときは AssistEdit で対象のフィールドを選びます。Business Central は、Access Control、Permission、Permission Set、User などのシステム テーブルの変更も追跡し、記録は Change Log Entries ページに時系列で並び、Date and Time、User ID、Table Caption、Field Caption、Type of Change、Old Value、New Value の列で、誰がいつどこをどう変えたかを見ます。[^c1-14][^c1-29]

使い方の勧めは明確です。元帳エントリや転記済みドキュメントは追加せず、Created By や Created Date などのシステム フィールドを優先します。All Fields は避けて、Some Fields で重要な項目だけを選びます。autoIncrement プロパティを使うフィールドの変更は、変更ログに記録されません。保持ポリシーを有効にするとジョブ キュー エントリが自動で作られ、既定では毎日 0200 時に実行されます。[^c1-14][^c1-29]

変更ログが記録しない時間もあります。性能のため、Business Central を次のバージョンへアップグレードする処理の間は変更ログがオフになり、終わるとすぐに記録を再開します。また、ユーザーが加えた変更が Change Log Entries に出るのは、そのユーザーのセッションが再開された後です。再開にあたるのは、セッションの期限切れと更新、別の会社やロール センターへの切り替え、サインアウトとサインインの3つです。[^c1-14]

項目の監視（Field Monitoring）は、機密性の高いフィールドの変更を見張り、通知する仕組みです。Monitor Field Change Setup ガイドで、データ機密性分類などの条件で対象を選び、通知を受けるユーザーと送信メールアカウントを指定します。使うページは3つで、設定は Field Monitoring Setup、フィールドごとの設定は Monitored Fields Worksheet、変更の履歴は Monitored Fields Log Entries です。Monitored Fields Worksheet では、監視するフィールドの追加と削除と、フィールドごとにメールで通知するか変更を記録するだけにするかの指定を行い、複数の行を選んで Set for Notification を選ぶと、それらのフィールドの変更がメールで通知されます。[^c1-14][^c1-29]

Monitored Fields Worksheet で1つ以上のフィールドを足して監視を始めたら、設定を効かせるために、一度 Business Central からサインアウトして入り直します。[^c1-14]

	変更ログ	項目の監視
対象	選んだテーブルと項目の変更	機密性の高い項目の変更
通知	履歴を残す	変更をメールで通知する

SAMPLE

	変更ログ	項目の監視
設定の場所	Change Log Setup	Monitor Field Change Setup ガイド、Field Monitoring Setup

フィールド監視を設定したフィールドを含むテーブルは、冗長を避けるため、変更ログの設定の対象に選べなくなります。通知を送るメールアカウントは、Microsoft 365 か SMTP のタイプにします。実在のユーザーに結び付かないアカウントを使います。Current User タイプは選べず、選んでも通知が送られません。[^c1-14]

機密性は Sensitive、Personal、Confidential、Normal の4つのレベルで分類し、Data Classification Worksheet と Data Classification ガイドでまとめて分類できます。セキュリティ運用のうち、監査ログとコンプライアンスのための活動の追跡は、パートナー、顧客、監査人の側の担当です。継続的な監視と脆弱性の評価は Microsoft の担当です。[^c1-30][^c1-35]

4つのレベルの中身は次のとおりです。

レベル	対象のデータ
Sensitive	データ主体の人種・民族、政治的意見、宗教、労働組合への参加、心身の健康、性、犯罪歴などの情報
Personal	単独で、または他の情報と組み合わせてデータ主体を特定できる情報
Confidential	会計などの業務に使い、外部に公開したくない業務データ。元帳エントリなど
Normal	ほかのどの区分にも当てはまらない一般のデータ

[^c1-30]

レポートの設定とレイアウト [1.3.1]

どの伝票にどのレポートを使うかは、Report Selection で決めます。既定では次の Report Selection ページがあり、地域や業種で増えます。

- Sales
- Project
- Service
- Purchase
- Cash Flow
- Warehouse
- Inventory
- Bank Account
- Production Order
- Reminder/Finance Charge

SAMPLE

Report Selection - Sales ページの Usage で文書の種類を選び、レポートを追加します。複数のレポートと出力順を設定できます。メール用の項目として、Use for Email Body、Use for Email Attachment、Email Body Layout Description、Report Layout があります。Use for Email Body は請求書番号や支払期日などの要約をメールの本文に入れ、Use for Email Attachment は関連する文書をメールに添付し、Email Body Layout Description は本文に使うレイアウトを指定します。[^c1-16]

レイアウトの種類は Word、RDLC、Excel、External の4つです。External は、特定のレポート向けにカスタムのレポート レンダラーが描画するレイアウトで、通常は Microsoft でなくパートナーが提供します。Layout Type は元ファイルの種類、Layout Source は出どころを示し、Word には Subtype（Default と Body）があります。出どころは Extension layouts、User-defined layouts（Extension 列が空のもの）、Custom layouts（廃止予定）の3つです。拡張機能由来のレイアウトは、クライアントから名前や種類を変えることも、差し替えることもできません。代わりに、拡張機能のレイアウトを元に、ユーザー定義やカスタムのレイアウトを作ります。Custom Report Layouts ページは廃止予定で、作れるのは Word と RDLC だけです。ユーザー定義のレイアウトへの移行が進んでいます。[^c1-15]

メールにカスタムのレイアウトを使うなら、ファイルの形式は Word だけです。RDLC は使えません。Composite Word layout は3つの部品を持ちます。Body（レポート固有の内容）、Theme（フォントと色）、Header/Footer（ロゴとページ設定）です。Theme と Header/Footer が使えるのは、Body サブタイプの Word だけです。[^c1-15]

既定のレイアウトは、Report Layouts ページで Layout の Set as default を選ぶか、会社を切り替えずに会社別に設定できる Report Layout Selection ページで設定します。依頼ページの Report Layout は、その1回だけの一時的な選択です。既定に戻すには、Report Layout Selection でレポートを選び Restore Default Selection を選びます。RDLC は SQL Server Report Builder か、Visual Studio の RDLC Report Designer 拡張で編集し、Report Builder は .rdl だけを認識するので、書き出した .rdlc は拡張子を .rdl に変えて開きます。[^c1-15][^c1-32]

既定のレイアウトは会社ごとに選ぶので、同じレポートでも会社ごとに別の既定を持てます。従来の Custom Layouts 機能で作った Word と RDLC のレイアウトは Report Layouts ページでは扱えず、既定にできるのは Report Layout Selection ページからだけです。[^c1-37]

ジョブ キューを設定して使う [1.3.2]

ジョブ キューは、レポートやコードユニットを、1回、または定期的に、背景で実行する仕組みで、Job Queue Entries ページで予約します。作成した直後のステータスは On Hold で、Set Status to Ready で Ready にし、Set On Hold で戻せます。たとえば、複数のユーザーが同時に販売オーダーを転記しても 1 件ずつしか処理できない時に、転記を背景に回せ、Dataverse と連携している時は、データを同期する時刻の予約にも使えます。レポートは、Send to を選んでから Schedule を選び、プリンター・時刻・日付・繰り返しを入れると、ジョブ キューで予約できます。ホーム ページの My Job Queue パートには、自分が開始してまだ終わっていないエントリが出ますが、このパートは既定では表示されません。[^c1-17]

ステータスは Ready、In Process、On Hold、On Hold Due to Inactivity、Waiting、Error、Finished の7つです。Waiting はカテゴリ コードを持つエントリだけで意味を持ち、予約はされているが、スケジュールされたタスクが有効でない状態を指します。同じカテゴリ コードのエントリは直列に動き、実行中のエントリが終わると、次に Waiting のエントリが Ready になります。[^c1-17]

取り違えやすいステータスは3つです。On Hold は、予定の開始時刻が来てもジョブが自動で始まらないよう止めておく状態で、すでに実行中のジョブには効きません。実行中のジョブを止めたいときは、対応するセッションやプロセ

SAMPLE

スを止めるなど、手で介入します。On Hold Due to Inactivity は、主に Business Central と Dataverse などの別のアプリとの同期を予約するエントリに使われます。Error は問題が起きた状態で、Show Error でメッセージを読めます。エラーのエントリは実行が止まり、手で再起動するまでそのままです。[^c1-17]

失敗時の再試行は、失敗してよい回数の Maximum No. of Attempts と、試行の間隔（秒）の Rerun Delay (sec.) の2つのフィールドで決め、外部サービスの一時的な停止からの自動復旧に使います。成功したジョブはキューから消えますが、定期ジョブは消えず、Earliest Start Date/Time が次回の実行時刻に更新されます。定期ジョブの頻度は性能に響くので、できるだけ大きい間隔にします（たとえば5分より15分や1時間）。[^c1-17]

エラーの調べ方は次のとおりです。Job Queue Entries で行を選び、Log Entries アクションを開き、エラーの行は Show Error で理由を読みます。失敗時の通知は、Assisted Setup の Set Up Job Queue Notifications ガイドで、起動した人、ジョブ キューの管理者、またはその両方に設定します。Power Automate は Job queue task failed イベントを購読できます。[^c1-17]

エラーが出たときの最初の対処は、エントリの再起動です。ステータスを On Hold にしてから Ready に戻すか、そのまま再起動します。エントリを削除して作り直す必要はありません。[^c1-17]

実行できる人にも条件があります。SUPER 権限セットがあれば、ライセンスの範囲の全オブジェクトを実行できます。委任管理者（Delegated Admin）はジョブ キュー エントリを作成、予約できますが、実行できるのは管理者とライセンスを持つユーザーだけです。[^c1-17]

ジョブ キューは、ほかの機能の裏側でも働きます。すべてのワークフロー通知は、ジョブ キューを通して送られます。そのため、Start Automatically From Server にチェックを入れてジョブ キューを動かしておかないと、通知が届きません。[^c1-23][^c1-17]

番号シリーズ（No. Series）を設定する [1.3.3]

番号シリーズは、顧客、仕入先、品目のカードや、販売や購買の伝票の No. を自動で振る仕組みです。No. Series ページで New を選んでシリーズを作り、Lines アクションで No. Series Lines ページを開いて、実際に使う番号の範囲を入れます。行がなければシリーズは使えません。コードを作っただけでは足りず、最低1行が要ります。1つのシリーズに、開始日（Starting Date）の違う複数の行を置けます。どの行が有効かを決めるのは Starting Date です。番号は最大 20 文字の英数字で、手入力でも同じです。[^c1-18]

No. フィールドが埋まる条件は3通りです。

状況	No. フィールドの動き
その種類のシリーズが1つで、Default Nos. が選ばれ、Manual Nos. が選ばれていない	次の番号が自動で入る
シリーズが複数あり、割り当てたシリーズの Default Nos. が選ばれていない	選択のルックアップが出る。No. Series ページで使うシリーズを選ぶと、次の番号が入る
シリーズが無い、または Manual Nos. が選ばれている	手入力する

[^c1-18]

Manual Nos. のトグルは、新しいカードや伝票で番号の手入力を許すかを決め、オフにすると手入力を禁じます。新しい顧客や仕入先を登録するときに手入力を認めたいなら、シリーズ自体の Manual Nos. をオンにします。使い切っ

SAMPLE

たとき、つまり範囲の最後の番号に達したときは、No. フィールドが手入力の欄として出ます。No. Series ページで解決します。[^c1-18]

欠番は、既定では許されません。監査上の法的な要件のためで、許したい場合は監査人や経理責任者に相談します。財務の監査の対象にならないシリーズ（顧客、見積、倉庫活動など）は、No. Series Lines ページの Allow Gaps in Nos. をオンにすると欠番を許せます（作成後でも変更できます）。銀行、GIRO、入金の仕訳帳で消込をするとき、番号に 6 文字のシステム ID（たとえば -12345）が付きます。9,999 件を超えて扱うなら、番号は 14 文字未満で設計します。[^c1-18]

1つの用途に複数のシリーズを使うときは、関係（Relationships）を作ります。No. Series で元のシリーズの行を選んで Relationships を選び、Series Code に、そのシリーズに関連づけたい別のシリーズのコードを入れ、関連づけたいコードごとに 1 行を足します。設定ページには、先頭のシリーズのコードを入れます。顧客や仕入先のテンプレートにシリーズを割り当てておけば、ユーザーがテンプレートを選んだ時点で、そのテンプレートのシリーズから番号が振られます。[^c1-18]

どのカードや伝票にどのシリーズを使うかは、販売なら Sales & Receivables Setup など、設定ページの Numbering または Number Series FastTab で選びます。品目のカードで手入力を認めたいときは Inventory Setup の Item Nos. に、サービスなら Service Management Setup の Service Item Nos. に、Manual Nos. のシリーズを選びます。Vendor Card で Self-Billing Agreement をオンにして Self-Billing Invoice Nos. を選ぶと、その仕入先専用のシリーズが優先されます。比べる相手は、Purchases & Payables Setup の Posted Self-Billing Inv. Nos. です。[^c1-18]

Copilot で番号シリーズを提案させる機能（Suggest number series with Copilot）は、production-ready preview です。使うには、Copilot & agent capabilities で有効にしてある必要があります。[^c1-33]

Copilot とエージェントの機能を有効にする [1.3.4]

Copilot はシステム機能で、全体をオンやオフにすることはできません。管理者は、個別の機能の非アクティブ化や、ユーザーごとのアクセスの付与と拒否で制御します。有効化の前提は、Business Central online を使っていることと、Business Central の管理者であることです。[^c1-19]

操作は Copilot & agent capabilities ページを検索で開き、機能を選んで Activate か Deactivate を押して行います。一覧は preview と generally available に分かれ、状態は Active と Inactive です。Copilot とエージェントの機能は、preview または一般提供になった時点で、既定でアクティブになります。止めたい機能は管理者が自分で非アクティブにします。[^c1-19]

データの扱いには、Allow data movement があります。環境と別の Azure 地域でデータが処理される可能性があるときだけ、ページの上部に出るトグルで、Azure OpenAI がその地域で使えるようになると表示されなくなります。欧州（West と North）、フランス、ドイツ、ノルウェー、スウェーデン、スイスの環境は、EU Data Boundary の中で処理されるので、Allow data movement は既定でオンです。プロンプトと出力のデータは、不正利用の監視のため最大 24 時間保存されることがあり、Azure OpenAI の基盤モデルの学習には使われません。[^c1-19][^c1-27]

どの地域の Azure OpenAI で処理されるかは、環境がある地域で決まります。

環境がある地域	処理のされ方
米国	地域をまたがない。同意の操作は要らない

SAMPLE

環境がある地域	処理のされ方
欧州、フランス、ドイツ、ノルウェー、スウェーデン、スイス	EU Data Boundary の中で地域をまたぐことがある。トグルは既定でオン
英国	Copilot は環境と同じ地理的な領域で処理し、エージェントは EU Data Boundary の中で処理する。トグルは既定でオン
オーストラリア、インド	Copilot は環境と同じ地理的な領域で処理し、エージェントは米国で処理する。トグルは既定でオン
アジア、ブラジル、カナダ、日本、韓国、南アフリカ、アラブ首長国連邦	米国の Azure OpenAI で処理する。トグルは既定でオン

トグルをオフにすると、地域をまたぐ処理が要る機能はその処理ができず、使えなくなります。EU の環境でオフにすると、Copilot の機能が組織で使えなくなります。英国でエージェントについて同意せずにオフにすると、Copilot もエージェントも使えません。英国やオーストラリアでは、トグルをオンにしたままエージェントの機能をすべて止めれば、Copilot だけを使えます。

環境の Azure の地域は、Business Central 管理センターで環境を選び、詳細の Azure Region フィールドで見ます。この地域は、環境を作るときに管理者が選んだ国/地域で自動で決まり、国/地域は作成後に変えられません。Marketplace のアプリやカスタマイズなど Microsoft 以外の発行元の生成 AI 機能は、それぞれが使う Azure OpenAI の地域を自分で決めるので、どの地域のサービスを使うかは拡張機能の発行元に確かめます。プロンプトと出力は不正利用の監視のために最大 24 時間保存されることがありますが、Azure OpenAI の基盤モデルの学習、再学習、改善には使われません。[^c1-19][^c1-27]

ユーザーが Copilot を使うための権限は、機能ごとに決まります。Analysis assist、Autofill、Chat、Summarize の4つは、Copilot Sys Features 権限セットか、個別のシステム オブジェクトの実行権限で使えます。オブジェクトは Analysis assist が 9710 Allow Copilot Analysis Assist、Autofill が 9700、Chat が 9690、Summarize が 9680 です。ほかの機能はページの権限で決まり、権限セットでは足りません。

機能	要る権限
銀行口座の照合の支援（Bank reconciliation assist）	ページ 7250 Bank Acc. Rec. AI Proposal と 7252 Trans. To GL Acc. AI Proposal
マーケティング文の提案（Marketing text suggestions）	ページ 5836 Copilot Marketing Text
代替品目の提案（Suggest substitute items）	ページ 7410 Item Subst. Suggestion と 7411 Item Subst. Suggestion Sub
販売明細の提案（Sales line suggestions）	ページ 7275 と 7276

バージョン 29 以降は、Chat の機能が、従来の Chat with Copilot の代わりに Microsoft Copilot in Business Central の体験を使えるかを決めます。[^c1-19]

組み込みのエージェントは2つが代表です。

項目	Sales Order Agent	Payables Agent
仕事	受け取った依頼から見積と注文を作る	メールで届く請求書を処理する

SAMPLE

項目	Sales Order Agent	Payables Agent
インスタンス	会社ごとに複数設定できる。指標も別々。アーカイブ済みの構成は読み取り専用で、有効なインスタンスの数に数えない	会社ごとに1つだけ。多くのユーザーが使える
前提	新しいインスタンスの作成には Configure All Agents (ID 9665) のシステム権限が必要。既存のインスタンスの管理は、9665 か、エージェントのユーザー アクセスの一覧で Can Configure が選ばれていれば足りる	構成できるのは、エージェントのユーザー アクセスの一覧で Can Configure が選ばれた人か、Configure All Agents (ID 9665) のシステム権限を持つ人。Microsoft 365 タイプ (ユーザーまたは共有メールボックス) のメールアカウントを監視する。有効化にはメールボックスの Read and manage (Full Access) 権限が必要
監視するメール	Microsoft 365 タイプ (ユーザーまたは共有メールボックス) のアカウント。フォルダーを選ばなければ受信トレイ (Inbox) を監視する。承認した送信者だけを処理するなら、メールボックスに専用のサブフォルダーを作ってエージェントをそこへ向け、承認した送信者のメールを Outlook の規則でそのフォルダーへ移す。手動でタスクを始めるだけなら、メールボックスをつながなくてよい	監視するフォルダーを Folder で指定できる。空ならメールボックス全体を監視する
Email review		推奨は Manage per sender。送信者の認証と既知の送信者の一覧でレビューの要否を決める。一覧で Approve の送信者と、認証された社内の送信者はレビューなしで処理し、Reject の送信者はタスクを作らず飛ばす。それ以外の送信者は処理の前に人がレビューする。Never はすべてレビューなしで処理し、Always はすべてレビューを求める
処理の制限		添付が10個を超えるメールは丸ごと飛ばす。10ページを超える PDF と 5 MB を超える PDF は処理しない。1日に100通を超えるメールは処理しない
試用		本番環境で未アクティブのとき、最初の50件の請求書を課金なしで処理する。50件で自動的にフル モードに移る。設定ガイドの Try the Payables Agent で PDF の請求書をアップロードすると、トライアル モードで自動的に有効になる。トライアル中は何も自動では転記されない

[^c1-26][^c1-38][^c1-39]

Sales Order Agent の既定のオプションは覚えておいてください。Send quotes for confirmation と Make orders from quotes はオン、Review quotes/orders、Select only available items、Include capable to promise はオフです。Send quotes for confirmation がオンだと、エージェントは見積を顧客に送って確認を求めます。Make orders from quotes もオンなら、顧客が確認した見積を販売注文に変換します。[^c1-26]

SAMPLE

マーケティング文の下書き、銀行口座の照合の支援、チャットなどの Copilot の機能は、どれも Copilot & agent capabilities の一覧から有効にし、止めます。マーケティング文の下書きを使うには、ページ 5836 Copilot Marketing Text の権限が要ります。[^c1-19]

ディメンションとディメンション値を設定する [1.4.1]

ディメンション（dimension）は、エントリを分類する値です。売上注文などの伝票で、プロジェクトや部門などを追跡して分析でき、勘定科目を増やして複雑な勘定科目表を作る必要もありません。Dimensions ページで、Project、Department、Area、Salesperson などのディメンションごとに1行を作り、各ディメンションに値を設定します。ディメンションと値は必要なだけ作れ、会社の全員が使えます。値は勘定科目表と同じく階層にでき、細かい粒度に分けてサブセットを合計できます。階層を作るには、すべてのコードがアルファベット順に並んでいる必要があります。[^c1-20]

ディメンション値の種類（Dimension Value Type）は Standard、Heading、Total、Begin-Total、End-Total の5つで、Begin-Total から End-Total までが合計の範囲になります。転記できるのは Standard と Begin-Total の値で、それ以外の種類の値でエラーになったときは、値の種類を Standard か Begin-Total に直します。AREA の値を次のように並べると、地域別の集計と、大きな地域の合計の両方が取れます。

Code	Name	種類
10	Americas	Begin-Total
20	North America	Standard
30	Pacific	Standard
40	South America	Standard
50	Americas, Total	End-Total

Indent Dimension Values を実行すると、Begin-Total と対の End-Total の間にある値が1段字下げされ、同じ範囲の値が合計されて各 End-Total の Totaling が更新されます。Totaling に範囲を手で入れるのは Total と End-Total で、Standard、Heading、Begin-Total では空のまま。5つの種類の意味は次のとおりです。

種類	意味
Standard	通常の転記に使う値
Heading	値のまとまりの見出し
Total	直前に並んでいない一連の値の残高を合計する値。範囲は Totaling に手で入れる
Begin-Total	合計する一連の値の始まりの印。End-Total と組で使う
End-Total	一連の値の合計。Begin-Total と組で使う

[^c1-20][^c1-21][^c1-36]

ディメンションセット（dimension set）は、ディメンション値の一意の組み合わせで、ディメンションセット エントリ（1エントリが1値）として保存され、共通の dimension set ID を持ちます。仕訳行、伝票ヘッダー、伝票行は、各値を直接持たず、ディメンションセットを指す dimension set ID だけを持ちます。セットはデータベースに1回だけ保存される

SAMPLE

ので、容量が減り、性能が上がります。関連テーブルは Dimension Set Entry がテーブル 480、Dimension Set Tree Node が 481、Dimension Value が 349 で、共通の処理は Codeunit 408 Dimension Management が担います。[^c1-20][^c1-31]

新しいディメンションを、行や新規レコードで一度でも使うと、使った時点でディメンションセットが作られるため、転記しなくても削除できなくなります。分析には Set Dimension Filter アクションが使え、勘定科目表やエントリのページの合計をディメンションで絞れます。個々の元帳エントリのディメンションは、Chart of Accounts の Ledger Entries からエントリを選んで Dimensions アクションで見ます。Ledger Entry Dimensions ページは、1エントリずつ表示します。[^c1-20]

グローバル ディメンションとショートカット ディメンション [1.4.2]

設定の場所は General Ledger Setup ページの Dimensions FastTab です。2つの種類を区別します。

種類	数	使いどころ
グローバル ディメンション	2つだけ	Business Central のどこでもフィルターに使える（レポート、バッチジョブ、XMLport など）。会社が定義して名前を付ける
ショートカット ディメンション	最大8つ	仕訳帳、伝票行、元帳エントリのフィールド。Dimensions ページを開かずに選べる

2つのグローバル ディメンションは、エントリ行と伝票ヘッダーで、ショートカット ディメンションとしても自動で使えます。[^c1-20]

Dimensions ページの Code Caption と Filter Caption は、画面に出る欄の名前を決めます。Code Caption は、ショートカット ディメンションにしたときに仕訳帳や伝票に出る欄の名前です。Filter Caption は、ディメンションをフィルターに使うときのフィルターの欄の名前です。たとえば Code が AREA のディメンションなら、Name を Area、Code Caption を Area Code、Filter Caption を Area Filter のように付けます。[^c1-36][^c1-20]

変更は軽くありません。グローバルまたはショートカットを変えると、そのディメンションで転記済みのすべてのエントリが更新されます。時間がかかり、性能に響き、テーブルがロックされる場合があり、追加や変更をすると準備のために自動でサインアウトとサインインが起きます。グローバルは Change Global Dimensions、ショートカットは Change Dimensions アクションで変えるので、選ぶ前によく使うものを慎重に決めます。[^c1-20]

Change Global Dimensions には2つのモードがあります。

モード	動き	向く規模
Sequential（既定）	1つのトランザクションで変更する。複数のテーブルをロックし、他のユーザーをブロックする。大規模なデータベースでは完了しないことがある	転記済みエントリが少ない会社
Parallel	複数のバックグラウンド セッションに分け、複数のトランザクションにする。Parallel Processing トグルをオンにする	大規模なデータベース

SAMPLE

手順は、General Ledger Setup で Change Global Dimensions を選び、ページの上部で 2 つのモードのどちらかを選び、Global Dimension 1 Code と Global Dimension 2 Code に新しいディメンションを入れます。そのあと Sequential なら Start を選びます。Parallel なら Prepare を選ぶと、Log Entries タブに変更するディメンションの情報が入るので、サインアウトしてサインインし直してから Start を選びます。Parallel では、アクティブなデータベースセッションが2つ以上あると、更新が始まりません。Sequential の場合は、新しいディメンションを入れて Start を押します。[^c1-20]

マスター データの既定のディメンション [1.4.3]

勘定に既定のディメンション（default dimension）を割り当てると、行に勘定番号を入れたとき、そのディメンションが仕訳や伝票にコピーされます。コピーされた値は、必要なら行で変更や削除ができ、顧客、仕入先、品目、G/L 勘定などが対象です。複数の勘定をまとめて設定するには、Default Dimensions-Multiple ページを使います。項目は Dimension Code、Dimension Value Code、Value Posting の3つで、選んだ勘定の間で値が食い違うと、(Conflict) と表示され、Value Posting で選んだルールは、選んだすべての勘定に付きます。[^c1-20]

Value Posting は、転記時のルールです。

値	意味	守らないと
空欄	ルール無し	
Code Mandatory	値の入力が必須	値が空だと「Select a %1 for the %2 %3.」
Same Code	既定と同じコードでなければ転記できない	値が違うと「Select %1 %2 for the %3 %4.」。既定が空のコードに非空のコードを入れると「%1 %2 must be blank.」
No Code	そのディメンションをエントリに含めてはならない	含めると「%1 %2 must not be mentioned.」

エラーの原因が既定のディメンションの Value Posting にあるときは、Default Dimension ページで Value Posting を変えて直します。

G/L 勘定の DEPARTMENT に既定として SALES を置き、Value Posting を Same Code にした場合、仕訳行で ADMIN を入れて転記すると、既定と違うコードなので「Select DEPARTMENT SALES for the G/L Account …」の形のエラーで止まります。直す場所は、仕訳行ではなく Default Dimension ページの Value Posting です。[^c1-21]

値を割り当てずに必須だけにしたいときは、Dimension Value Code を空欄のまま、Value Posting に Code Mandatory を選びます。既定の値は無いが、入力は必須になります。Adjust Exchange Rates または Post Inventory Cost to G/L のバッチジョブで使う勘定には、Code Mandatory と Same Code を選びません。これらのバッチは、ディメンションのコードを使えないからです。[^c1-20]

販売と購買の伝票では、既定のディメンションの優先度（後述）を使うと、ヘッダーのディメンションは顧客や仕入先から来たものとして扱われます。手動で入れた値も、既定の値も同じ扱いです。品目や場所に既定があって、顧客や仕入先には無い場合に、特に効きます。ヘッダーで場所を指定したとき、既存の行のディメンションと食い違えば、既存の行を上書きするかを確認されます。[^c1-20]

SAMPLE

ディメンションの組み合わせをブロックする [1.4.4]

組み合わせは、2つのディメンションの間で決めます。Blocked は、ディメンション値に関係なく、同じエントリに両方を転記できません。Limited は、同じエントリに両方を転記できますが、特定の値の組み合わせに限ります。No limitation は、制限が無く、全部の値が使えます。Dimension Combinations ページで、セルごとに3つから選びます。[^c1-20]

Limited を選んだら、Dimension Value Combination ページを開き、禁じたい値の組み合わせのセルに Blocked と入力します。空欄のセルは、その組み合わせが許可されているという意味です。同じディメンションが行と列の両方に並ぶため、組み合わせは2回現れ、設定は両方に自動で表示されます。左上から下の対角にあたるセルは、行と列が同じディメンションなので選べません。選んだオプションは、そのフィールドを抜けるまで表示されません。Show Column Name を選ぶと、コードの代わりにディメンション名が出ます。

たとえば DEPARTMENT と AREA の組み合わせを Limited にし、Dimension Value Combination で SALES と AREA の 40 の交点に Blocked を入れたとします。SALES と AREA の 40 を同じエントリに入れた転記だけが止まり、SALES と AREA の 20 の組み合わせは空欄のままなので通ります。[^c1-20]

転記で止まる場面と、出るメッセージは次のとおりです。

場面	メッセージ
ディメンションの組み合わせが Blocked	Dimensions %1 and %2 can't be used concurrently.
値の組み合わせが Blocked	Dimension combinations %1 - %2 and %3 - %4 can't be used concurrently.
ディメンション自体が Blocked	%1 %2 is blocked.
ディメンション値そのものが Blocked	%1 %2 - %3 is blocked.

未転記のドキュメントで起きたときは、ディメンションセットから該当のディメンションや値を外すか、削除して直します。[^c1-21]

勘定タイプの既定のディメンション [1.4.5]

顧客全体、仕入先全体のように、勘定のタイプ（テーブル）単位で既定を決める設定です。Dimensions ページで対象のディメンションを選び、Account Type Default Dim アクションを開いて、既定のディメンションごとに1行を入れます。Dimension Value Code を空にして Value Posting を Code Mandatory にすると、値は決めずに、タイプ全体で入力を必須にできます。Same Code と No Code の挙動は、勘定の既定の場合と同じで、エラーの文も同じです。[^c1-20][^c1-21]

個々の勘定が、勘定タイプの既定と別のディメンションを必要とするときは、その勘定に新しい既定のディメンションを設定します。勘定の既定が、勘定タイプの既定を置き換えます。つまり優先されるのは、より細かい単位の設定です。勘定または勘定タイプに既定を設定した後は、ディメンションと値が行に自動で入力されます。[^c1-20]

ここで起きる競合が、次の節の優先度の役割です。顧客の勘定と品目の勘定のように、勘定のタイプごとに既定のディメンションが違うと、1つのエントリに既定の候補が複数出ます。[^c1-20]

SAMPLE

既定のディメンションの優先度 [1.4.6]

勘定タイプごとの既定が競合するときは、優先度のルール（priority rules）で解決します。Default Dimension Priorities ページを開き、Source Code にその優先度を使うエントリ テーブルのソース コードを入れ、優先度ごとに1行を入れます。設定したいソース コードごとに、同じ手順を繰り返します。同じソース コードで2つのテーブルに同じ優先度を付けると、テーブル ID がいちばん小さいテーブルが選ばれます。[^c1-20]

顧客には既定のディメンションが無く、品目には DEPARTMENT が ADM、場所には DEPARTMENT が PROD の既定があり、優先度は Customer、Item、Location の順だとします。伝票を作って先に場所を指定すると、以降に追加する行の既定は PROD になり、品目の行を追加しても、ヘッダー由来なので PROD のままです。逆に、先に ADM の品目の行を追加してから、ヘッダーで場所を指定すると、既存の行と競合するため、上書きするかの確認が出ます。[^c1-20]

つまり、同じ設定でも、入力する順番で結果が変わります。Microsoft も、既定のディメンション、優先度、伝票への入力順をテストすることを勧めています。とくに、場所と品目に既定があり、顧客や仕入先には無い販売と購買の場面で注意します。[^c1-20]

標準のワークフロー（Workflows）を設定する [1.5.1]

標準でサポートされるワークフローは2系統です。1つは Power Automate のフロー（自動化とインスタントのフロー）、もう1つは、組み込みのワークフロー テンプレートに基づく承認ワークフローです。MB-800 で問われるのは主に後者です。[^c1-22]

ワークフローの各ステップは、イベントと応答の組です。画面の区画は3つあります。

区画	役割
When Event	流れを始めるトリガーを選ぶ
On Condition	イベントに関連するフィルター条件で絞り込む
Then Response	次にすることを指定する。レスポンスのオプションで調整する

イベントと応答の選択肢はシステムが定義していて、足すには拡張機能の開発が要ります。既定の版に無いイベントや応答が要る時は、Power Automate を使うか、Marketplace のアプリを入手するか、Microsoft のパートナーとアプリのコードをカスタマイズします。[^c1-22][^c1-41]

テンプレートは Workflow Templates ページに並びます。Microsoft 提供のテンプレートのコードは MS- で始まります（たとえば MS-PIW）。これは編集できないワークフローです。作るには Workflows ページで New Workflow from Template を選び、テンプレートを選んで OK を押します。Code に -01 などが付き、テンプレートから作った1つ目であることを示します。テンプレートを変更して元に戻したいときは Reset Microsoft Templates を使います。Microsoft のテンプレートがすべてリセットされ、1つだけのリセットはできません。他の Business Central からエクスポートしたワークフローを、インポートして作ることもできます。書き出す側では Workflows ページでワークフローを選んで Export to File を選びます。取り込む側では Workflows ページで Import from File を選び、Import ページで Choose を選んで XML ファイルを選び、Open を選びます。[^c1-22][^c1-40]

ワークフローのインポートは、Workflows ページの Import from File アクションで行います。同じ Code のワークフローがすでにあると、そのステップはインポートしたワークフローのステップで上書きされます。[^c1-40]

SAMPLE

作成したワークフローは、Workflow ページの Enabled トグルをオンにして有効化します。最初の Entry Point ステップのイベントが起きたときに、流れが始まります。Code は最大 20 文字です。Category はワークフローやテンプレートをまとめるための項目で、承認ワークフローでは開始条件や承認の処理に影響しません。E-document のワークフローは、Category を EDOC のままにします。Document Sending Profile ページの E-Document Workflow と E-Document ページの Workflow Code は、この Category のワークフローしか受け付けません。別の Category に移すと、これらの欄で選べなくなり、それを使う送信プロファイルは検証で止まります。[^c1-22][^c1-41]

When Event を変えると Then Response も変わり、その応答を参照している他のステップの Then Response が壊れる場合があるので、変えた後は次のステップを必ず見直します。たとえば Vendor Approval Workflow の主要な When Event を変えると、その Then Response は参照とともにクリアされます。承認のワークフローでは、When Event に Approval of a document is requested（伝票の承認が求められた）のようなトリガーを選び、An approval request is approved（承認依頼が承認された）などのイベントで次のステップへ進め、たとえば仕入先の名前の変更を承認させる時は、When Event を A vendor record is changed、On Condition を Name is Changed にします。An approval request is approved の行の条件は、まだ承認者が残る時が Pending Approvals:>0 で、次の承認者へ依頼を送ります。これ以上の承認者が要らない時の条件は Pending Approvals:0。An approval request is rejected の行では、Then Response に Discard the new values を選び、変更された新しい値を捨てます。[^c1-22][^c1-41]

承認要求を作る応答には、次のオプションがあります。

オプション	働き
Due Date Formula	承認者が要求を処理できる日数
Delegate After	代理の承認者へ自動で委任するかと、その時期。承認を求めた日から1日後、2日後、5日後から選ぶ
Approver Type	承認者の決め方。Salesperson/Purchaser なら、Approval User Setup の Salespers./Purch. Code に指定したユーザーが承認者を決める
Approver Limit Type	承認要求エントリをだれに作るか。下の4つから選ぶ

Approver Limit Type の4つは、承認要求エントリを作る範囲が違います。Approver Chain は、依頼者の承認者を順にたどり、最初に資格のある承認者まで全員分を作ります。ここでの資格は、承認の上限が要求の金額を上回ること。Direct Approver は、承認の上限に関係なく、依頼者の直属の承認者にだけ作ります。First Qualified Approver は、依頼者の最初の承認者にだけ作ります。Specific Approver は、Approver ID で選んだユーザーに通知します。[^c1-41]

通知のしくみを設定する [1.5.2]

標準の Business Central は、メールか社内ノート（internal notes）で通知します。誰に届くかは、Approval User Setup ページの各行で、Approver ID に指定したユーザーに承認依頼が送られる、という決まりです。通知の設定は、Approval User Setup でユーザー行を選んで Notification Setup アクションを開くと、Workflow Notification Setup ページが開きます。[^c1-23]

Notification Type は3つです。New Record は行動が必要な新規レコード、Approval は承認依頼、Overdue は対応が遅れているときのリマインドです。Notification Method はメールか社内ノートを選び、メール通知のレイアウトは

SAMPLE

Report 1320 Notification Email を修正して決められます。メールを手段にするには、Business Central で送信者と受信者の両方のメールを設定します。[^c1-23]

スケジュールは Notification Schedule で決めます。項目は Recurrence（送信周期）、Time、Daily Frequency（Weekday か Daily）などです。曜日の Monday から Sunday や、Date of Month、Monthly Notification Date もあり、Date of Month では、月の最初の日、最後の日、または特定の日を選びます。Weekday は勤務週の毎日、Daily は週末を含む毎日です。[^c1-23]

次の3点が、試験の読み違えやすいところです。1つめは、通知が送信者ではなく受信者の通知設定に従うため、承認依頼が承認者のスケジュールに従い、即時に届かない場合があることです。2つめは、Approval User Setup から開けばその承認ユーザーの設定、Tell Me から開けば全ユーザーへの設定になることです。3つめは、ワークフロー通知がすべてジョブ キューを通ることです。[^c1-23]

ワークフローの応答として通知を出すときのオプションは、Notify Sender（承認の依頼者に通知）と Recipient User ID です。ほかに Notification Entry Type、Link Target Page、Custom Link があります。Notification Entry Type は、レコードの変更、承認依頼、期限超過の3つです。[^c1-22]

承認とワークフローのユーザー グループを設定する [1.5.3]

承認ワークフローに参加する人は、Approval User Setup ページで設定します。承認の流れを作る前に、先にこの設定を済ませます。1行が1人の依頼者を表します。

フィールド	意味
User ID	承認の流れに関わるユーザー
Salespers./Purch. Code	売り手や買い手のコード。担当者が承認者でもあるときに入れる
Approver ID	User ID の人が出した依頼を承認する人
Sales Amount Approval Limit	User ID の人が承認できる販売額の上限（LCY）
Purchase Amount Approval Limit	同じく購買額の上限（LCY）
Request Amount Approval Limit	購買見積について承認できる上限（LCY）
Unlimited Sales / Purchase / Request Approval	金額に関係なく承認できる
Substitute	Approver ID の人が不在のときの代理
Approval Administrator	承認ワークフローのブロックを解く権限者

[^c1-24]

Unlimited Sales Approval を選ぶと Sales Amount Approval Limit は入力できません。購買と見積も同様です。Request Amount Approval Limit が効くのは、Workflow Response ページの Approver Limit Type で Approver Chain を選んだときだけです。[^c1-24]

代理の優先順位は次のとおりです。Approver ID の人が使えないとき、承認は Substitute フィールドのユーザー、直属の承認者、承認管理者の順に回ります。承認管理者は、承認ワークフローのブロックを解除する人（代理への委任や、期限超過の依頼の削除）で、設定できるのは1人だけです。[^c1-24]

SAMPLE

複数の人に承認させるときは、Workflow User Groups ページでグループを作ります。検索で開いて New を選び、Code（最大 20 文字）と Description を入れ、Workflow User Group Members FastTab にメンバーを加えます。メンバーの User Name は、User Setup ページに存在するユーザーである必要があります。メンバーごとの Sequence No. は他のユーザーに対する順序を示し、承認者の種類の Workflow User Group と組み合わせて使います。[^c1-24]

Sequence No. の効き方は次のとおりです。全員が同じ番号なら、1人が承認すれば足ります。より大きい番号の人がいても、同じ番号どうしは1人で足ります。ただし階層のいちばん最後の番号に同じ番号のユーザーが複数いるときは、その全員の承認が必要です。依頼者と承認者を兼ねさせてはいけません。同じユーザーが workflow user group で依頼者と承認者を兼ねると、その依頼は自動で承認されます。複数の承認者がいる場合、状態を Approved にできるのは、大きい Sequence No. の承認者だけです。小さい番号の承認者の承認は、状態に影響しません。[^c1-24]

1人の承認者に任せるなら Approval User Setup の Approver ID と金額の上限で決め、複数の承認者に順番に承認させるなら Workflow User Group の Sequence No. で決めます。購買見積の Request Amount Approval Limit は、Approver Limit Type が Approver Chain のときだけ効きます。[^c1-24]

SAMPLE

サンプルはここまでです

続き(第2章〜巻末)は、MB-800 問題集のご購入で、頻出度別ノート・暗記用ノートと合わせて3点すべてダウンロードできます。

SAMPLE

MB-800 学習用テキスト(無料サンプル)

版
2026年11月版(MB-800 出題範囲(Microsoft Learn 公式 Study guide・Skills measured as of June 30, 2026)準拠)

発行
IT資格道場(https://www.shikaku-doujou.com)

お問い合わせ
info@shikaku-doujou.com

Microsoft、Dynamics 365 および Microsoft の製品名・サービス名は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。記載されているその他の会社名・製品名・サービス名は、各社の商標または登録商標です。

本教材は公式シラバスの内容を基に作成したもので、Microsoft Corporation との提携・承認関係はありません。

本文・図表・設問はすべてオリジナルの著作物です。無断での転載・複製・再配布・二次販売はできません。お気づきの点は info@shikaku-doujou.com までご連絡ください。

SAMPLE